

## 花をうめる

新美

南吉

その遊びにどんな名がついているのか知らない。ただそんな遊びをいまの子どもたちがはたしてするのか、町を歩くとき私は注意してみるがこれまでみたためしがない。あのころつまり私たちがその遊びをしていた当時でさえ、他の子どもたちはそういう遊びを知っていたかどうかもあやしい。いちおう私と同年輩の人にたずねてみたいと思う。

なんだか私たちのあいだにだけあり、後にも先にもないもののような気がする。そう思うことは楽しい。

してみると私たちのなかまのたれかが創案したのだが、いったいたれだろう、あんなあわれ深い遊戯をつくり出したのは。

その遊びというのは、ふたりいればできる。ひとりがかくれんぼのおにのように眼をつむって待っている。そのあいだに他のひとりが道ばたや畑にさいているさまざまな花をむしってくる。そして地べたに茶飲茶碗ほどの——いやもっと小さい、さかずきほどの穴をほりその中にとつてきた花をいい按配にいれる。それから一穴に硝子の破片でふたをし、上に砂をかむせ地面の他の部分とすこしもかわらないようにみせかける。

「ようしか」とおにが催促する、「もうようし」と合図する。するとおにが眼をあけてきてそのあたりをきよろきよろとさがしまわり、ここぞと思うところを指先でなでて、花のかくされた穴をみつけるのである。それだけのことである。

だがその遊びに私たちが持った興味は他の遊びとは

ちがう。おににかくしおおせて、おにを負かしてしま  
うということや、おにの方では、早くみつめて早くお  
にをやめるということなどにはたいして興味はなかつ  
た。もっぱら興味の中心はかくされた土中の一握つかの  
花の美しさにつながっていた。

砂すなの上にそつとはわせてゆく指先にこつんとかたい  
ものがあたるとそこに硝子がらすがある。硝子の上の砂をの  
ける。だがほんのすこし。ちようど人さし指の頭のあ  
たる部分だけ。穴からのぞく。そこには私たちのこの  
みなれた世界とは全然別の、どこかはるかにの、  
おとぎばなしか夢ゆめのような情趣じょうしゆを持った小さな別天  
地があつた。小さな小さな別天地。ところがみている  
とただ小さいだけではなかつた。無辺際むへんさいに大きな世界  
がそこに凝縮ぎようくされている小ささであつた。そのゆえ  
にその指さきの世界は私たちをひきつけてやまなかつ  
たのである。

いつもその遊びをしたわけではない。それをするの

は夕暮ゆぐれが多かつた。木にのぼったり、草の上をとびま  
わつたり、はげしい肉体的な遊戯ゆげにつかれてきて、夕  
まぐれの青やかな空気のなごやかさに私たちの心も何  
がなしとけこんでゆくころにそれをした。それをする  
相手も、たれであつてもかまわぬというのではなかつ  
た。第一そんな遊びを頭からこのまないなかまもあつ  
た。女の子はたいていすきだつた。

ふたりいればできると私はいつたが、ひとりでもで  
きないことはなかつた。私はひとりでもよくした。ただ？  
ひとりるときは自分がふたりになつてするだけのこと  
である。つまり花をとつてかくしておき、そこからす  
こしはなれたところへできうべくんば家の角を一つま  
わつたところまで、いつておにになり、眼めをとじて百  
か二百かぞえ、それからさがしに出かけるのである。

だがそれをひとりするときには心に流れるうらわび  
しさが、硝子がらすの指先にふれる冷たさや、土のしめっぱ  
い香かおりや、美しい花の色にまでしみて余計よけいさびしくな

るのだった。

ふたりか三人でその遊びをしたあと、家へ帰る前に美しい作品を一つ土中にうめておきそのまま帰ることもあった。その夜はときどきうめてきた花のことを思い出し床の中でも思い出してねむるのである。

そんなとき土中のそのちいさな花のかたまりは私の心の中のたのしい秘密であって、母にもたれにも話さない。つぎの朝いつてさがしあててみると、花は土のしめりですこしもおれずしかし明るい朝の光の中ではやや色あせてみえ私はそれと知らず幻滅を覚えたのであった。また前の晩にうめておいた花のことをつぎの朝、子ども心の気まぐれにわすれられてしまうこともあった。そういう花が私たちにわすれられたままたくさん土にくちてまじったことだろう。

私たちは家に帰る前に、また、そのとき使った花や葉を全部あつめほんとうに土の中に土をもつてうめ、上を足でふんでおくこともあった。遊びのはてにする

この清算は私の心に美しいもの純潔なものをもたらした。子どもでありながらなんといじらしいことをしたものでろう。

ある日の日暮どき私たちはこの遊びをしていた。私に豆腐屋の林太郎に織布工場のツル—の三人だった。私たちは三人同い年だった。秋葉さんの常夜燈の下でしていた。

ツルは女だからさすがに花をうまくあしらい美しいパノラマをつくる、また彼女はそれをつくり私たちにみせるのがすきだった。ではじめのうち林太郎と私のふたりがおにでツルのかくした花をさがしてばかりいた。

私はツルのつくった花の世界のすばらしさにおどろかされた。彼女は花びらを一つずつ用い草の葉や、草の実をたくみに点景した。ときには帯のあいだにはさんでいる小さい巾着から、砂粒ほどの南京玉を出しそれを花びらのあいだに配した。まるで花園に星のふ

ったように。そしてまた私はツルがすきだった。

遊びにはおのずから遊びの終わるときがくるものだが、最後にツルと林太郎とふたりで花をかくし私がひとりおになつた。「よし」といわれて私はさがしにいったが、いくらさがしてもみあたらない。「もっと向こうよ、もっと向こうよ」とツルがいうままにそのあたりをなでまわるがどうしてもみあたらない。林太郎はにやにや笑って常夜燈にもたれてみている。林太郎はただツルの花をうずめるのを見ていただけに相違ない。「お茶わかしたよ」とどうとう私はかぶとをぬいだ。すれば、ツルの方で意外のところから花のありかを指摘してみせるのが当然なのだがツルはそうしなかつた。「そいじゃ明日さがしな」といった。

私は残念でたまらなかつたのでまた地びたをはいまわつたがついにみつからなかつた。でその日は家に帰つた。たびたび常夜燈の下の広くもない地びたを眼にうかべた。そのどこかに、ツルがつくつたところのこ

の世のものならぬ美しさをひめた花のパノラマがあることを思った。その花や南京玉の有様が手にとるよう  
に閉じた眼にみえた。

朝起きるとすぐ私は常夜燈の下へいつてみた。そしてひとりでツルのかくした花をさがした。息をはずませながら。まるで金でもさがすように。だがついにつからなかつた。

それから以後たびたび思い出してはそこへいつてさがした。花はもうしおれはてているだろうということ  
はすこしも考えなかつた。いつでも眼を閉じさえすれば、ツルのかくした花や南京玉が、水のしたたる美しさでうす明かりの中にかぶのであつた。たれか他の者にみつけ出されると困るので、私はひとりのときにかぎつてそこへさがしにいった。

遊び相手がなくてひとりさびしくいるとき、常夜燈の下にツルのかくしたその花があるという思いは私を元気づけた。そこへかけつけ、さがしまわるあいだの

希望は何にもかえがたかった。いくらさがしてもみつからない焦燥もさることながら。

ところがある日、私は林太郎にみられてしまった。

私が例のように常夜燈の下をすみからすみまでさがしまわっている、いつのまにきたのか林太郎が常夜燈の石段にもたれてとうもろこしをたべていた。私は林太郎にみられたと気づいた瞬間ぬすみの現行をおさえられたようにびくつとした。私はとっさのあいだにごまかそうとした。

だが、林太郎は私の心の底までつまり私がツルをすいているということまでみとおしたようににやにやと笑って「まださがいとるのけ、ばかだな」といった。

「あれ嘘だっただよ、ツルあ何も埋げやせんだっただ」  
私は、ああそうだったのかと思った。心についていたものがのぞかれたように感じて、ほつとした。

それからのち、常夜燈の下は私にはなんの魅力もないものになってしまった。ときどきそこで遊んでいて、

ここには何もかくされてはないのだと思うとしらじらしい気持ちになり、美しい花がかくされているのだと思いいこんでいた以前のことをなつかしく思うのであった。

林太郎が私に真実を語らなかつたら、私にはいつまでも常夜燈の下のかくされた花の思いは楽しいものであったかどうか、それはわからない。

ツルとはその後、同じ村にいなながら長いあいだ交渉をたっていたが、私が中学を出たときおりがあらって手紙のやりとりをし、あいびきもした。しかし彼女はそれまで私が心の中で育てていたツルとはたいそうちがっていて、普通のおろかな虚栄心の強い女であることがわかり、ひどい幻滅を味わったのは、ツルがかくしたようにみせかけたあの花についての事情と何か似ていてあわれである。

### 「花をうめる」

※『新装版 新美南吉童話集2  
おじいさんのランプ』（2012  
年・大日本図書株式会社）所収  
の「花をうめる」をもとに一  
部、漢字表記とルビを編集しま  
した。